不折氏談片

中村不折氏談

○新聞雜誌の批評（承前）

△さういふ風に新聞雜誌が珍らしいのを歡迎するから、毎年異常の天才が出るやうに見えて、其の勢で行くと、佛蘭西の藝術界には大層な勢ひで、藝術家の大成するものがどれだけ出るか分らぬ程の有樣であるが、そんなに豪い美術家が、幾年の後になつて見ると、全く名が聞えなくなる。

△ブグロー、ローランス程の名家になれば豪いもので、價値は定まつてゐる。夫が惡評許り受ける。夫をほんとうにして眞面目に聞けば大變の間違ひだらうと思ふ。なまじつか佛語の見える人が誤りはせまいか、新聞雜誌などにちよい〳〵飜譯が出るが、ブグローなどはつまらぬと考へてる連中があるらしい。

△かういふことは日本などで大に注意す可きものだらうと思ふのです。

○ローランス氏の畫

△佛蘭西の美術界には理想派と寫實派があつて、今でも互に競つてゐるが、ピユービス●ド●シヤバンヌなどは理想派で大にやつたのです。

△ローランス氏は十分に形の方の研究もしてゐるが、又理想の方もやつて、中々六ケしい理想のものも出來る。

△高尙な色で、理想を描くことがある。然し一般になまめかしいものが歡迎されるので、ローランス氏のは餘り多くの人に喜ばれないやうだが、決して畫が惡いのではない。いはゞまづいのだらう。

△此のまづいといふのは、世間のいふまづいとは大に趣が異つてゐるので、吾々の方のまづいと言ふので、決して畫が惡いといふのでは無い。世間の人は、此吾々の言ふまづいといふ味が分らないやうだ。

△此のローランスの『地神の使王を責む』といふのと、此アルバート●メニヤンのゴブラン織の草稿―エスキース（筆者いふ、共に氏が佛蘭西土產にして、共に今月の太平洋畫會展覽會に出品さる可きかと聞く）とを比較すれば、丁度雪舟と探幽との差があらうと思ふ。ローランスのは澁い高尙なもので、雪舟といふ所、メニヤンも達筆なもので、矢張り佛蘭西で一流といはるゝものだが、筆が達者で、色も好いがどうも雪舟ではない。丁度雪舟と探幽といふ比較が適當してゐる。

△ローランスの此畫は題は『地神の使王を責む』といふのですが、夫丈では意味が分りますまい。（筆者いふ、圖は王の玉座に座して首垂れ居れば、其前に翼ある女神手を擧げて、王を責むるの勢あるものにして、色は暗き黑勝の赭色に、一二白を引きたるものなり）

△之は地神が使を王に遣つて、王は地上の權力を有してはゐるが、人の上に深く其權力を振ふの權利は無い、地は神の掌る所で、神の意に從はず、我儘に振舞ふのは宜しくない。王のする所は、凡て其權力の下に何事でもなし得るやうに思つてゐるやうだが、夫は權利として有してゐるものではない、王は人間として、人の上にある許りだ、地上に大いなる權力を持つてゐるものでないといつて責めさせる所です。

△全くローランスの理想から出來たもので、ローランスはよくかういふ理想の畫を描くが、之は私が出立の時特にローランス先生が描いて呉れたもので、實に立派なものです。之はまア私の好い寶だと思つてゐます。

○氏の今後

△あつちにゐれば、みんなが非常な勉强をするから、隨分勉强も出來るが、どうも歸つて來るとさういくまいと思はれる。然しかういふ風にエスキースを研究して、深くやつて行くと、どうも只だ其儘にしては置かれぬから、矢張りあつちにゐた時と同じやうに勉强して行かうと思ふのです。

△實際に研究して行くと、中々他を顧みられないから、何かといふ作よりは、十分に研究して行く方針にして、まア手一本でも十分にやれゝば好いから今後も別に展覽會などへ出品はせず、又暇もないから、十分今迄研究した所を續けてやつて行く丈けにして、暫らくは出品などはしまいと思ふのです。（完）

最近物故せる二大美術家

潮聲

二、アドルフ●フリードリッヒ●エルドマン●フオン●メンツェル（Adolf Friedrich Erdmann von Menzel.）

メンツェルはゲルマンの有せし大美術家にして、近代に於けるゲルマンの矜りたりし老畫伯なり。然も惜む可し、去二月十日九十一の高齡を以て逝く。

メンツェルは千八百十五年ブレスラウに生る。壯より畫名高く、各處に出品して名譽の大賞を得しこと幾干なるを知らず、その重なるものには、有功章、リージョン●ド●ノール、バヴアリアの聖ミカエル章等あり。伯林、維也納、ミユンヘンのアカデミーの員として、又白耳義國立水彩畫會の員として、世の尊敬を拂ふ所となれり。以て其盛名の一端を推知し得可し。

メンツェルの作の多くは、殆んど獨のフリードリツヒ大王の生涯より材を取れり。伯林國立美術館には『千七百五十年のフリードリッヒ大王の圓卓』『ザンス、ゾウチに於ける笛の合唱』『近代のチクロップ』あり。

又此大王の諸書を畫解したり。メンツェルの石版畫は其數極めて多く、其水彩畫は非常に世の推稱する所たり。

メンツェルにつきての批評をあぐれば、

エミル●ミシエル

は千八百七十七年十二月の『レヴィユー●デ●デユー●モンデ』に評して曰く、

『是等虛僞の諸作の上に、遙に高く、伯林畫家アドルフ●メンツェルの純朴なる水彩畫を置くはその當を得たるものなる可し―彼のフリードクビッ二世にのみ捧げし繪畫、デッサンを以て有名なるメンツェル。

ミユンヘンに於ける博覽會には十二の稱す可き作を出品しぬ、いづれも極めて丁寧なるものにして、種々の題目を捉へ、才幹の柔和と、全く異常なる性質の調和を示せり。『千八百六十六年の戰爭後の伯林凱旋』は、是等の組立物の中最も苦心研究のものなりき。中央市街を通りて、勝利の軍人は花球の雨の下を靜々と隊伍を整へて行けば、兩側の家々の中には憂の雲深く鎖せり。此畫家は此の如きの日の對比を集め、左にはあらゆるもの皆歡喜なり、凱旋の景なり、されど右には傷者の優しき情もて迎へられ、厚き看護を受く、加之も亦喪服せる憐れなる遺族は、今玆に凱旋す可くして、玆にはあらぬ亡き人の爲に泣かんとや、人の歡喜よりそと逃げ行く。

猶二不思議として、此畫家の描きしインスプルックとザルツブルグの會堂の畫を傳ふ可し。前者は極めて明快なるものにして、白壁、繪畫、祭壇は鍍金の飾を以て燦爛たる光輝あり、然も其明るさは急に消えて、蠟燭は神秘にして冷き蔭の裡に燃ゆ、後者は祈念に凝れる男、女の沈默と深き念想に沈めるを現はせり。

吾人が屢〻獨畫家の作に於て指摘せし重きこと虛僞なることは、之を此メンツェルには見ることなく、此畫家に於て、智覺あり趣味あり、華麗にして優雅なる、吾が佛國の大家の一流に置きて多く遜色なき眞の藝術家を、初めて獨に發見す。』

次に千八百六十六年『ツァイトシユリフト●フィユール●ビルデンデ●クンスト』（美術雜誌）の一評家は、メンツェルの戴冠式の畫につきていへらく、

『彼は明に確固たる寫實家なり、彼の望む所は物が實在せる如く其要點を寫すにあり。是以上進むことは決して彼の採らざる所なり、こは何人も明に認め得べき所にして、彼は全く其主義を定めて、其限外に出づることを成さず。

メンツェルは透明に於て缺ぐる所あり、殊に蔭に於て然るより判ずるに、彼は決して好彩色家にはあらず。彼の技術は優れ、服裝（貴女の服裝を除く）に於て、勳章を下げたる上衣にまれ、繡ある制服にまれ、且つ室內の裝飾に於て、大膽に大きく描くと雖も、技巧的の組合即ち線條體質の美に就ては、その考慮を用ふる所なかりき。

然らば吾人が初より非常の佳作と稱したりし此作の長處は何なる可きや。メンツェルは確に藝術と美とは關聯を有するものなることを認めざる可し。彼に向つては、藝術の眞髓は、特質を表はすことにありとするものなり。こは實に一方的の觀察なり、然れどもそが非常に巧妙なる技術を以て表現せらるゝ時は、必ず大に尊敬を受く可きなり、而して此の如き藝術家が、吾人にその力量を示す時に於ては、吾人は只だ其者によりてのみ、そを測るを得るなり。

メンツェルは肖像畫の顏に於て極めて優れたるものを吾人に與へたり、然れども亦、是れ等の間には、美の目的に於て大に缺くるものなきにあらず、殊に婦人の群に於て甚だしきを見る、……されど、男性の顏面は、凡て遙かに精巧に、優秀に、緊要なるものを致せり。

噫白耳義の彫刻大家ディラン氏は昨年の最後の訃を齎せしものにして、獨の老畫伯アドルフ、フオン、メンツェル氏は本年の最初に凶音を傳へしものなり。上來述ぶる如く、近年の老大家相續いで逝き、拂ひ盡して已まざらんとす。實に悲しむべきの極なり、然り而して其跡を襲で世に天才を現はすもの果して幾干かある。

惜しむべき人は逝きて歸らず、續いで興る斯壇の名家は更らに多きを見ず。然れども逝きしの人は世に賜を遺せる所多し、壽の運命に盡くるもその作の壽はとはに限りなし、吾子は是等の名家の訃を聞く毎に轉た羨ましさの念に打たれずんばあらず、とはに限りなきの壽を有する作を遺されし吾人は、人の壽のはかなき運命を思ふて切に又とはに限りなき生命の作を遺さんことに日夕を惜しまずんばある可らず。（終）